

ワーグナー/楽劇「トリスタンとイゾルデ」より 前奏曲と愛の死 (市響版)

ドイツの作曲家ワーグナーは、従来のアリアをつないだ歌劇とは異なった、音楽劇（楽劇）を創始しました。それは一幕ないし一場を通じて途切れることなく続く〈無限旋律〉と、それぞれに意味をもつライトモチーフといった独自性あふれるものです。この「トリスタンとイゾルデ」は上演時間が約4時間にも及ぶ音楽劇です。チューリヒの絹織物商オットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデとの不倫をきっかけに書かれた、作曲者の体験と思想を音楽の中に封じ込めた自伝的な作品とされています。

*

イゾルデは傷を癒やすことができるアイルランドの女王。トリスタンはアイルランドの属国コンウォール国の勇士です。イゾルデの婚約者を一騎打ちで殺し、そのとき自らも深傷を負った

トリスタンは、そのことを隠してイゾルデの手当を受けます。その正体を見破ったイゾルデは婚約者の仇をとることを考えますが、トリスタンのまなざしに恋をし、傷の回復とともに二人は引かれ合うようになります。



不倫関係のあったヴェーゼンドンク夫人

ところがその時、コンウォール国王は妃を失って久しく、イゾルデを王妃にめとる事を決めてしまいます。トリスタンはイゾルデを恋する想いを振り切り、君主への忠誠を選ぶこととし、国王とともにイゾルデをアイルランドへ迎えに向かいます。舞台はその帰路から始まります。

〈前奏曲〉は、チェロが奏でるトリスタンの動機と、木管楽器によるイゾルデの動機から始まります。木管が入る瞬間のハーモニーは「トリスタン和音」と呼ばれる和音です。これまでのハーモニーの持つ解決に向かうという動的機能ではなく、その瞬間の純粋な響きを目的としたこの和音は、ドビュッシーやこのコンサートの後半で演奏されるマーラーにも多大な影響を与えました。

コンウォール国に向かう船の中でイゾルデは、愛しているにもかかわらず自分を花嫁として君主に差し出すトリスタンをののしります。イゾルデの怒りはとどまらず、侍女が王を愛するために用意した惚れ薬を渡すと「その時になったら自分は自ら毒薬を飲む」と言い放ちます。

陸が近づくとさらにイゾルデは、トリスタンを自分の婚約者を殺しの因縁を蒸し返し、その償いに毒入りワインを飲むよう要求します。腹を決めたトリスタンは杯を半分まで飲むと、イゾルデはそれを奪い取り残りを飲み干します。皮肉なことに、そこに入っていたのは毒薬でなく惚れ薬でした。そして二人は互いに激しく愛し合うようになります。

第二幕の最後で、友人にイゾルデとの密会の場を密告されたトリスタンは、その友人と決闘しますが、戦いの最中、相手の剣にわが身を投げ出して深手を負います。

続く第三幕の冒頭、ブルターニュ城に連れ戻されたトリスタ

ンは、死にゆくわが体を感じながらイゾルデの船を待ちます。この傷を癒やすのはイゾルデしかいないのです。荒涼とした海を表す〈嘆きの調べ〉と呼ばれるコール・アングレで幕が開きます。

しかしトリスタンはイゾルデの到着とともに息絶えてしまいます。イゾルデは惚れ薬に翻弄された禁断の〈愛の死〉を歌いあげます。前奏曲の「トリスタン和音」で解決を見せることのなかったハーモニーはこの世とあの世の間を行き来するがごとく転調を繰り返し、宇宙と一体となります。最後の言葉は、「溺れ、沈み… 我を忘れ… この上なき喜び!」。イゾルデは息絶え、ハーモニーも主和音に解決します。



2 番目の妻コジマとワーグナー

愛の死 訳詞

穏やかに静かに微笑
彼が目をやさしく 開く様が
見えている? 見えない?
次第に明るく 輝きを増し、
星たちに照らされて 空を昇っていくのを・・・

見えない?
彼の心臓が 雄々しく、
気高く 胸の中で盛り上がるのを
その唇から 幸せそうに穏やかに
甘い吐息は 静かにこぼれるのを

友よ! 見て!
感じないの? 見えないの?
聞いているのは 私だけ?
こんなにも美しく 静かに、
悲しげに、すべてを語り、
そこから おだやかに調和し、
私に迫り、私を揺さぶり、
優雅に こだまし、
私の周りに響くのを

明るく響きながら、
私の周りに
それは穏やかな風なの?
甘い香りの雲なの?
うねるように、私を取り囲み
私は吸い込み、耳を澄まし
すすり、沈んでいくのでしょうか
それとも甘い香りの中で、消えていくのですか?

このうねる様な 怒濤の中で、
この鳴り渡る 響きの中で、
世界の息吹の中で、
全てを 吹き飛ばす
溺れ、沈み... 我を忘れ...

この上なき喜び!

マーラー/交響曲第9番

「自分はこの人生の中で何を残すか？」マーラーの交響曲第9番はこの質問を投げかけながら、干支が一回りした私の心の中に響きます。私は10年前だったらそうは感じなかったかもしれませんが。マーラーは今の私の年齢の10歳前にこの曲を書き上げています。交響曲第9番はマーラーが完成させた最後の交響曲です。

マーラーは交響曲第9番のジククスをととても気にしていたと言われています。実際に「交響曲第9番」の作曲と前後して死去した著名な作曲家は、番号付けの解釈は様々あれ、ベートーヴェン、シューベルト、ブルックナーなどがいます。

いずれにしてもマーラーほど死を多くの交響曲の中に刻印した作曲家を私は知りません。マーラーはなぜそんなに死に対して神経質だったのでしょうか？

*



マーラー (1909)

交響曲第9番の作曲当時にマーラーを診断した精神分析医ジークムント・フロイトは、それが幼児体験によるものであるとしています。

生地ボヘミアでの幼児死亡率が50%の当時、グスタフ・マーラーはガラス窓もない貧しい家で、つぎつぎと生まれては2歳の誕生日を迎えない弟妹たちの死に直面します。並外れた金銭欲と出世欲の持ち主の父、こんどこそは丈夫にと自らの健康を顧みることなく子どもの世話に追われ、夫の抑制の効かない激情に必死で耐える母。グスタフの日常の苦しい出来事からの逃避は辻音楽師の手回しオルガンだったといっています。

マーラーが音楽を本格的に学ぶきっかけは、野心あふれる父がブルジョア階級の必需品としての音楽の重要性を知ったことです。父はアコーディオンとその個人レッスンを与えます。グスタフは地元の民謡、ダンス音楽、練兵対のラッパ、行進曲を栄養にめきめき音楽の力をつけていきます。

10歳ではピアノの神童と呼ばれ、16歳でウィーン楽友協会音楽院のピアノ科に入学し忍耐の優等生となったマーラーも、神のごとく尊敬するワーグナーに初めて会ったときは、指1本動かすことができず、ただ立ちつくすだけだったといっています。当時の音楽院では、革新的すぎてワーグナー礼賛がタブーだった中、ワーグナーの信奉者と和声学を教えるブルックナーとの出会いはマーラーの音楽に大きな影響を与えます。マーラー自身、ブルックナーの弟子であることを自らも認めています。

ブルックナーの交響曲第3番の初演時、嘲笑を残しつつつぎと聴衆が帰る中、最後まで残ったのはマーラーを含むたった7人だったといっています。意気消沈したブルックナーが改作をはじめるとマーラーは、「まったくその必要はない」と強く言い、出版に際し自らピアノ連弾による編曲を受け持ちました。マーラーの交響曲に対する思いはこの師弟関係から生まれたのかもしれませんが。

ブルックナー同様、作曲ではなかなか認められなかったマーラーが生活のために選んだのは、ヤル気のない楽員の吹きだまりとなった田舎のカベルマイスタ（楽長）でした。「手に負えない若造」といわれながら、作曲する時間を捨てても

マーラーは働きます。彼がかかわったほとんどの劇場の財政は改善され、マーラーが指揮する「ドン・ジョバンニ」はプログラムにも認められます。

劇場の仕事を始めて8年後、マーラーはついに自作の交響曲を発表する機会を得ます。新聞の批評は「交響曲の伝統的な法則と秩序に反するもので、ひとつの犯罪である」と惨憺たるもので、「最終楽章が始まったとき、会場にいた婦人は驚いて手にしていたものを全部床に落としてしまった」と記録に残っています。

「やがて私の時代がくるであろう」マーラーは言いました。

悲哀、歓喜、絶望、死への恐怖、自己存在価値、依存、自立、愛。交響曲第9番を聞くと、マーラーはわれわれ人類がもつさまざまな激情を描くために、それぞれが長大ですべてに関係性が高い交響曲群を残したのだと気づかされます。

*

マーラーは死への恐怖からか交響曲第8番の完成後、次の交響曲をあえて『大地の歌』と名づけたといわれています。そしてつぎのこの交響曲を書き終えたとき「やれやれ、これで危険は去ったというわけだ！」と言ったそうです。安心してその作品に「交響曲第9番」という曲名をつけた後、マーラーは自らの耳でこの曲を聞くことなくこの世を去ります。そして続く交響曲は未完に終わりました。



マーラーの墓

*

曲はゆっくり-速い-速い-ゆっくりの4楽章形式です。

第1楽章 ニ長調 4/4拍子 アンダンテ・コモド

カオスで短かなイントロを持つこの楽章は2つの主題が互いに結び付き合い、有機的に絡み合い、次第に1つの大きなうねりをつくってきます。

第2楽章 ハ長調 3/4拍子 おだやかなレントラー風のテンポで。いくぶん歩くように、そして、きわめて粗野に

テンポの異なる3つの舞曲が、**A|B|C|B|C|A|B|A**と不規則に並ぶ楽章です。

A：マーラーらしいどこか不吉な空気のある民族的な舞曲。

B：生き活きとしたワルツ風舞曲。

C：ゆっくりとしたレントラー舞曲。

第3楽章 イ短調 2/2拍子 ロンド～ブルレスケ。アレグロ・アッサイ。きわめて反抗的に

ブルレスケとはユーモアと皮肉を兼ね備えた道化師のようにおどけた曲想をいいます。曲は3つの部分でできていて、**A|B|A|B|C|A**というロンド形式のスケルツォです。

第4楽章 アダージョ 変ニ長調 4/4拍子 きわめてゆっくりと、さらに控えめに

祭壇にひざまずく自分が見えるような曲です。**A|B|A|B|A**+コーダ形式で、音楽は次第に大きな流れとなり、心に染みいっていきます。中間部や終結部では冷酷なほどの感情抑制の中、それはもはやマーラーの言葉ではなく神がマーラーを使って問いかけさせているように私の心の中に響きます。「あなたはこの人生の中で何を残すか？」と。